

人に肉薄し、社会を俯瞰する総合誌

● イグザミナ

# examiner

2008

2

薄くて暖かいメンズ下着のウォームビズ  
大学のアンチエイジングドック  
構想から半世紀 阪神高速「京都線」

BIG INTERVIEW-1

**川島 康生**

国立循環器病センター名誉総長

BIG INTERVIEW-2

**遠藤 正一**

日本ロングライフ社長

関西の経済・政治・社会・文化……を読む

和傘

伝統工芸に備わる「用」と「美」は、現代のプロダクト・デザインにも刺激を与える普遍的な価値があるのではないかと、日常を豊かに彩る工芸の数々を紹介する。



日吉屋の向かい宝鏡寺の境内に干された色とりどりの和傘。お寺のご好意でここに干させてもらうのも昔からの習わし。

幾何学的な美、透過光の魅力

「洋傘の骨は普通八本、針金の張力で押し出して張る構造。それに対して、和傘の骨は三十六本、七十二本、まですルエツトが全然違います。骨組みの幾何学的な美しさ。そして和紙や絹を通した透過光の柔らかさ。」  
—そう魅力を語るのは、日吉屋の五代目当主・西堀耕太郎さん。日吉屋は、京都市上京区宝鏡寺、通称・人形寺の向かいにある。この界隈には表千家不審菴、裏千家今日庵があり、茶道具の聖地と言える場所。日吉屋の和傘は、そんな表・裏千家御用達でもある。

西堀さんは和歌山県生まれ、新宮市職員として観光課で働いていたのだが、たまたま奥様の実家が日吉屋だった。番傘を見せてもらった時、「素直に「しぶいなあ、かっこいい」と思ったという。それに、エリザベス女王

文：藤 あつこ  
写真：大山記糸夫

昭和30年代くらいまでは、多くの家庭で使われていた和傘。その後、便利な西洋傘に取って代わられたが、今、またおしゃれ感覚で「和傘を差して町を歩きたい」という人が増えつつあるのだという。「すぐに破れてしまうのでは？」と心配になるが、きちんと作られた和傘は、そうそう壊れないし修理もできる。静かな注目を浴びる和傘の魅力に迫ってみよう。

やダイアナ妃が京都にいられた際、歓迎の茶会で使われた野点傘は、日吉屋のものだった。各国の元首の方を迎える際にも使われる傘。興味はさらに膨らんだ。

実際に耐えるものを丁寧に

一方、和傘を作るころはほとんど減っているのが現状。今、和傘を作ったり修理したりできるのは京都でここ一軒だけだそう。全国でも十軒ほどしかない。先のない業界だからと両方の両親に反対されながらも、西堀さんは日吉屋を継ぐ決心をした。「僕が魅力を感じたように、和傘を求めている人は他にもいるに違いないと思ったんです」。そこで目を付けたのが、観光課勤務の経験から、インターネット。実際にホームページを充実させると、全国からの注文が舞い込むようになった。

だけでなく、オリジナルのデザインでオーダーできるのも、お店のロゴマークを入れたり、力士の四股名を入れたり、最近では、ゲームのキャラクターが持っている傘を作って欲しいなどというオーダーもあるそう。

ちなみに、雨の日に差すなら、みやげ物屋に売っている安価なものだとすぐに壊れてしまう。実用性を考えて作る日吉屋の和傘は、厳選した材料を使い、和傘に丁寧な工程を経て作られる。西堀さんは、三代目の祖母、義母に手ほどきを受けて技を磨く日々。

新たな試み、海外へも

ところで、技は受け継ぐだけに終わっていない。和傘の技術を活かし、洋室にも合うペンダントライトを「古都里」KOTORI」というブランドとして照明メーカーやデザイナーと共に開発。二〇〇七年度のグッドデザイン賞中小企業庁長官特別賞を受賞した。

和紙の透過光が柔らかく、おしゃれ。特に私がおもしろいと感じたのは、傘のように閉じてコンパクトに持ち運びや保管ができること。季節によって、色や模様の変うランプシェードに付け替えるのも楽しそう。海外でも紹介していく予定だという。

日本の伝統の技術を継承しながらそこにとどまらず、新しいものを考えて海外など広いエリアにも運出していく——五代目の頼もしさを感じた。

左) 胴貼りをしている西堀さん。  
中) 内側から見ても、幾何学的な美しさがある。  
左) 洋室にも合うようにデザインされた「古都里」KOTORIのペンダントライト。

